第一三〇回　昭和五十九年三月二十五日

史跡めぐり（川越地区）

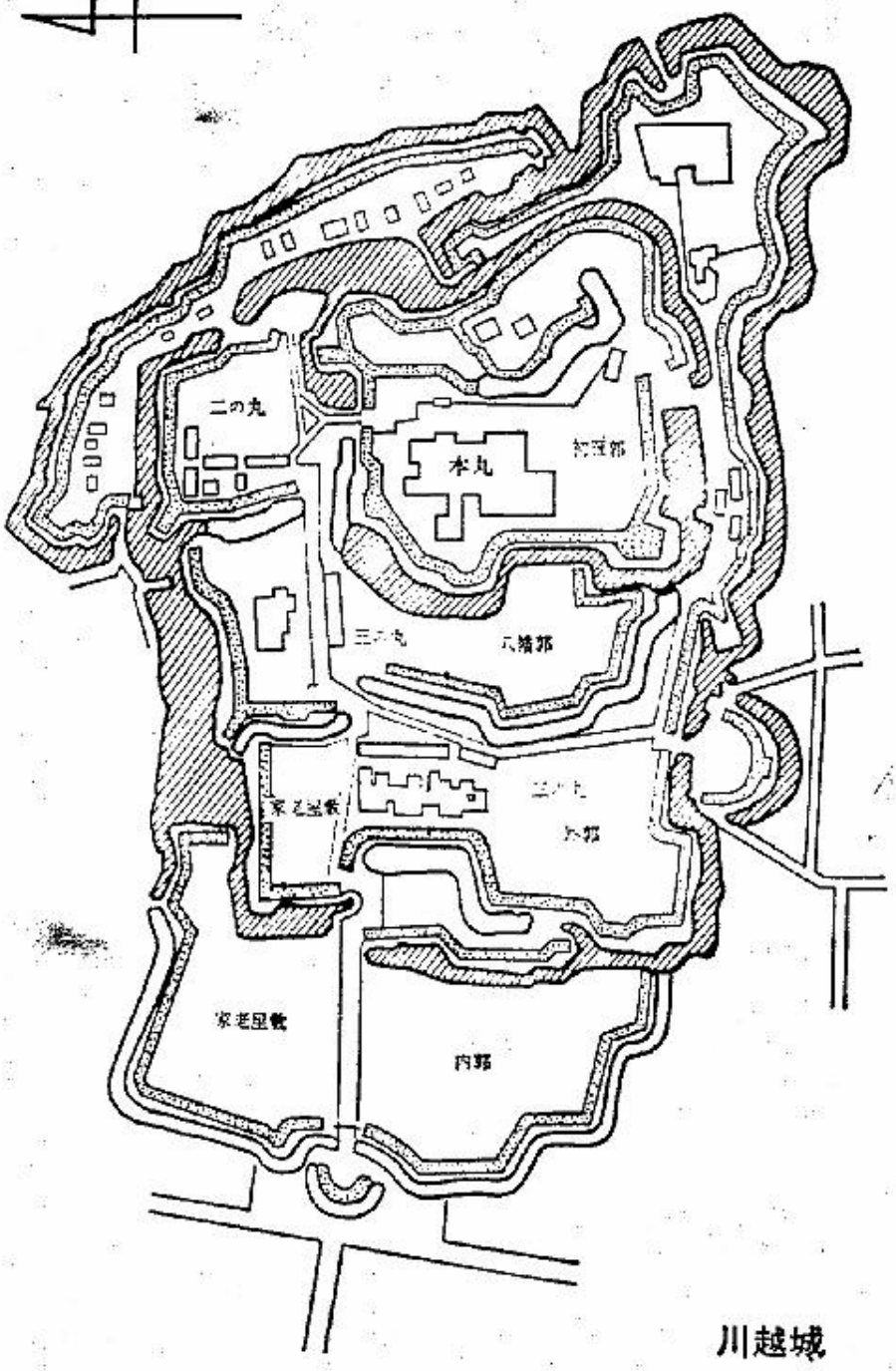
河越氏館跡

喜多院

川越城

川越夜戦古戦場

越谷市郷土研究会



川越城

第一三〇回史跡めぐり ご案内

とき　昭和五十九年三月二十五日　日曜

集合　南越谷駅前　午前八時三十分

コース　南越谷駅発九時十一分府中本町行―北朝霞乗替―東上線霞ヶ関―徒歩　常楽寺（河越氏館跡）―徒歩霞ヶ関駅―東上線川越市駅―徒歩喜多院―昼食―徒歩川越城跡―徒歩東明寺（川越底戦古戦場）―バス川越駅―東上線朝霞台乗替―武蔵野線南越谷

開散

東道役　理事　丸田昌夫

会費　二千五百円（交通・保険・拝観・資料代共）

その他　各自弁当をご持参ください

川越の歴史

川越市は武蔵野台地の東北端にあり、入間川が西北部を流れている。生活の条件がよかったので、隠戸・熊野の住居跡が多く残っている。平安時代には三芳野といわれ伊勢物語にも登場してくる。平安末期から鎌倉時代にかけては武蔵武士が発展し、やがて実権を握るようになった。当地方を支配したのは秩父氏の流れをくむ河越氏で、河越太郎重頼は鎌倉幕府の御家人となった。重頼の館跡は常楽寺周辺といわれており、土塁の一部が残っている。また仙波の中院は尊海僧正によって開かれ、天皇の勅願所となり、末寺三八〇と称する寺を持っていた。長禄元年（一四五七）太田道真が川越城を築き、上杉氏六代、北条氏四代と続いた。この上杉、北条の交替の時期に起こったのが、有名な天文十五年（一五四六）の川越夜戦である。北条氏の末期頃から家臣団の城下集住が進み、新期の川越城下町が形成されてきた。天正十八年（一五九〇）徳川家康の関東入部にともない、川越藩がおかれ、新藩・譜代の有力な大名を、ここに配した。また喜多院は慶長四年（一五九九）天海の

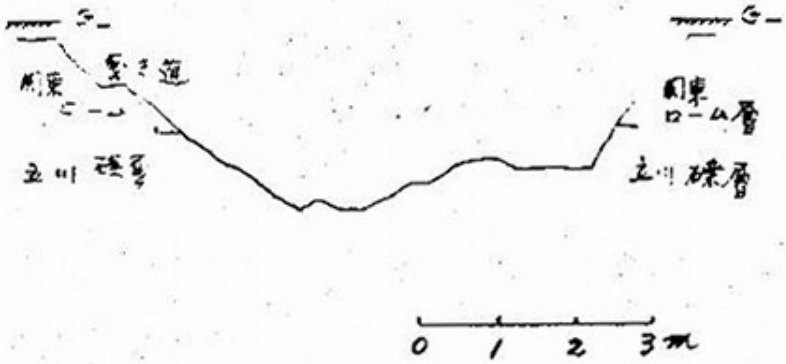
来住によって五百石の御朱印寺となり、寺運は大いに栄えた。
松平信綱は、川越城下町の町割を行ない、川越街道の整備、新河岸川の開削、野火止の新田開発など川越発展の基礎をきづいた。
松平吉保は三富開拓を行ない、松平大和守の時代になると、新河岸川を通して江戸に物資を輸送する商業が発展し、小江戸と呼ばれる繁栄をみせた。
幕末になって外国船が来航するようになると、川越藩は、浦賀の警備を命ぜられている。松平康英のとき明治維新をむかえ、同四年廃藩となった。

河越氏館跡

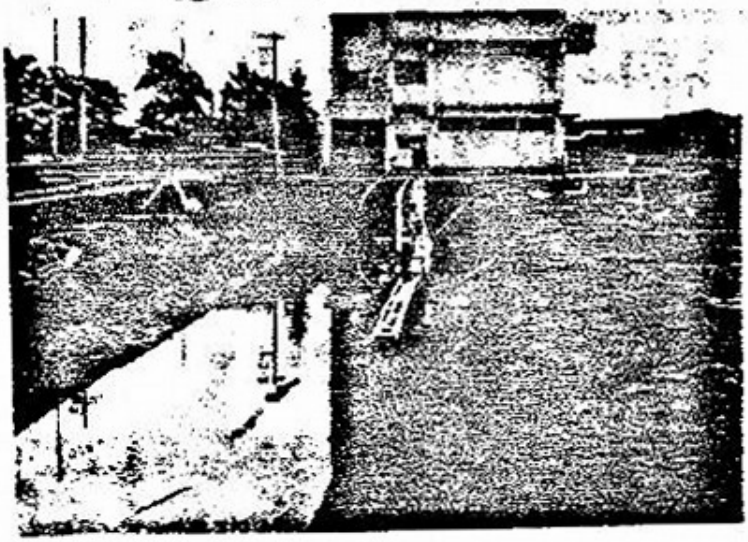
常楽寺の西側に、いまも南北に約百八十メートルほどの土塁が残されている。
この外側に二本の堀をめぐらしていたことが発掘調査の結果明らかになった。
その後、九次におよぶ調査が行なわれ、ほぼその規模が明らかになった。
その規模はおよそ二町四方で、館跡のほか、倉庫群、住民の掘立柱の建物群
井戸跡等多様な遺構が密集していた。
この地は、しばしば入間川の氾濫にあっている。

また第七次、第九次の発掘で運河址が見つかった。この運河址は館跡からゆるく曲り入間川に通しており、上幅十一メートル、下幅五メートルで、浅き道づけられていた。

運河断面



運河跡



河越氏について

桓武平氏の秩父氏の一門畠山氏は武蔵国河越荘の開発領主である。河越重頼は治承四年（一一八〇）源頼朝の蜂起の当初、同門の畠山重忠の誘いにより、江戸重長らとともに頼朝方の三浦義明の相模国衣笠城（現横須賀市）を攻め、義明は八十歳を過ぎた老齢であったが源氏累代の家人として一族ふ人とどまり、頼朝を始め息子の義澄らを海路安房へ落させた。その後頼朝は房総で兵力を集めて武蔵へ侵攻したとき、長井渡（現台東区橋場町と推定される）で畠山重忠、江戸太郎重長らとともに、頼朝に忠順を誓っている。その後は頼朝の信任厚く、木曽義仲討伐に功があった。元暦元年（一一八四）娘を源義経に嫁がせたが、その後義経の失脚のため重頼は誅されている。しかし河越一家は、未亡人に与えられた、これは重頼の妻は頼朝の乳母の娘であり、また頼朝の長男頼家の乳母をつとめた関係であろう。息子重員は畠山留守所総検校職を継ぎ、有力御家人の地位を確立した。南北朝時代の観応擾乱のとき、河越直重は、高、畠山、宮部宮氏らと足利尊氏方として戦功をあげ、相模国守護職に任ぜられた。応安元年（一三六八）関東に復帰した上杉氏に反抗し、江戸、

高坂、三浦氏等と平一揆を起したが、平定され滅亡した。

系図

重頼 ┬ 重員 ― 重資 ― 泰重 ― 経重 ― 重輔 ― 高重 ― 直重
　　└ 女（源義経室）

善光院　天台宗　、慈宗、仁波町

開祖は不詳であるが、天正年間に天海僧正が住してから、徳川家の帰依をうけて隆盛となった。

天海僧正は慶長六年と元和三年に大火があり諸堂を焼失してしまった。この時に高光が江戸城中の紅葉山にあった別殿を移したのが現存する客殿、書院、庫裏等であり、いづれも重要文化財に指定されている。客殿上段の間は家光誕生の間と伝えられている。これらの建物は移建時より約三十年前に建てられたものと推定されている。

山門　棟札により寛永九年の建立が確められ切妻造りの四脚門　重文

慈眼堂　正保二年（一六四五）の建立、天海僧正をまつる堂で、古墳の上に立っている。天海の木像が安置され、堂の後方には墓がある。

職人尽屏風　狩野吉信筆　さまざまな職人が生きいきと仕事をしている風景が画かれており、桃山時代から江戸初期にかけての風俗がうかがわれて貴重である。重文

吉信は昌庵と号し狩野永徳の子である。

板碑二基　いづれも二メートルをこえる雄大なものである。

暦応五年（一三四二）および延文三年（一三五八）南北朝、で九郎、で年号がきざまれている。　県指定重文

延文三年

高サ 四上 2.76m

上幅 62cm

下幅 69cm

厚サ 9.0cm

暦応五年

高サ 四上 2.32m

上幅 53cm

下幅 62cm

厚サ 8.5cm

東照宮

家康の遺体を日光に運ぶとき、善光院に四日止まり、天海によって盛大な法要が営まれた。　このゆかりで建てられたが寛永十五年の大火の後、同一六年に再建されたのが現在の社殿である。

重要文化財に指定されたものは、本殿・瑞垣・唐門・拝殿・幣殿・石鳥居・陽明門・三十六歌仙額である。　この三十六歌仙額は岩佐又兵衛筆であるが、現在は東京国立博物館に寄託されている。

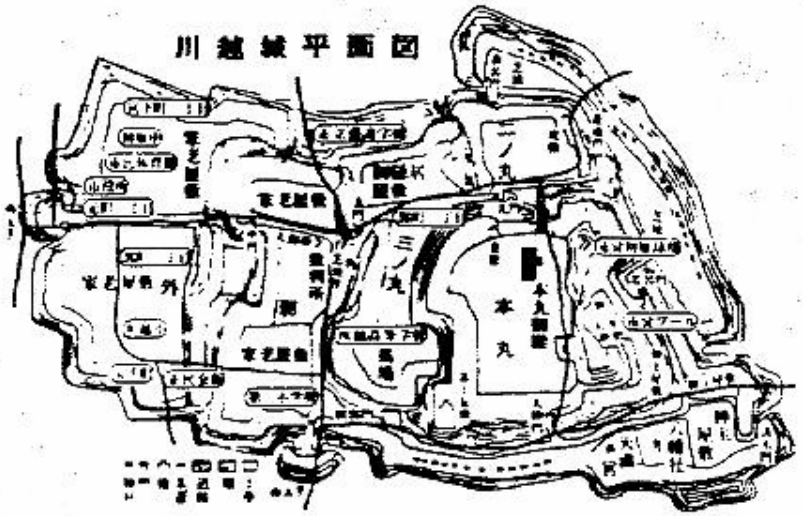
河越城

河越城は長禄元年（一四五七）太田資清（スケキヨ）道真の縄張りで、築かれたと伝えられる。これと同時に東方五里（二〇キロ）の地にある岩槻城が築かれ、また息子の道灌の手で江戸城が構築された。　これらの諸城は、南武蔵を勢力範囲とする扇谷上杉氏の戦略的拠点であった。　これまでの関東の諸城は、自領を守るための領主の居館であったり、また山城であったが、ここに始めて広い地域で互に連携を保つ戦略的な拠点としての城が出現している。

寛永十八年（一六四一）松平信綱が藩主となると、城域の拡張・増築が行なわれた。この川越の地は、江戸城北辺の護りであり、また関東平野の物資・生産集散の中心地であったため歴代幕府の有力な大名がこの地に配置されている。藩主八家二十一人のうち大老は酒井忠勝、柳沢吉保、老中は酒井忠利、堀田正睦、松平信綱、松平定信、松平斉典、松平康英の六人を数える。

歴代城主

幕府の役職	氏名	補任・初名・号	在職年月日	前城地	転封地	領高
	酒井重忠	河内守	天正18～慶長6・3・3	相模甘縄	上野厩橋	1万石
老中	酒井忠利	雲州守	慶長14・9・23～寛永6・11・14卒	駿河田中		3万7千石余
大老	酒井忠世	雲州守・号空印	寛永4・11～寛永11・閏7・5		若狭小浜	10万石
老中	堀田正盛	出羽守・加賀守	寛永12・3・1～寛永15・3・8	江戸在勤	信濃松本	3万5千石
老中	松平信綱	伊豆守	寛永16・1・5～寛文2・3・16卒	武蔵忍		7万5千石
	松平信綱	甲斐守	寛文2・4・16～寛文11・12・12卒		下総古河	7万5千石
	松平信綱	伊豆守・号宗見	寛文12・2・9～元禄7・1・7			7万石
大老	御沢吉保	美濃守・出羽守・保明号・保山元春	元禄7・1・7～宝永元12・21	江戸在勤	甲斐府中	11万2千3百石
老中	秋元喬知	摂津守・但馬守・喬朝	宝永元12・25～正徳3・8・14卒	甲斐谷村		6万石
	秋元泰朝	伊賀守・但馬守・泰朝	正徳4・9・29～元文3・9・5卒			増領6万石
	秋元凉朝	越中守	元文3・10・28～寛保2・4・3致仕			増領6万石
老中	秋元凉朝	摂津守・但馬守・号休徳	寛保2・4・3～明和4・閏9・15		出羽山形	増領6万石
	松平康福	大和守・直賢	明和4・9・15～明和5・6・10卒	上野厩橋		15万石
	松平康乗	大和守	明和5・7・29～文化7・1・18卒			増領15万石
	松平康乗	大和守	文化7・3・14～文化13・7・22卒			増領15万石
	松平康英	大和守・矩兵	文化13・8・27～嘉永2・11・5卒			増領17万石
	松平康英	越丸・典衛号・鶴寿・康英	嘉永3・3・7～嘉永7・8・18致仕			増領17万石
	松平康英	大和守	嘉永7・8・13～文久元・8・15卒			増領17万石
	松平康英	大和守	文久元・12・6～慶応2・10		上野厩橋	増領17万石
老中	松平康英	摂津守・右京亮・居敬守	慶応2・10・27～明治2・4・10致仕	長州萩倉		8万4百石余
	松平康英	摂津守	明治2・4・10～明治4・7・14廃藩			8万4百石余



川越城 本丸御殿

日枝神社　　小仙波町

慈覚大師が喜多院を創建した際、鎮守として近江の日吉神社を祀ったもの
東京赤坂の日枝神社は太田道灌が江戸城の主護神として文明二年(一四七〇)に
ここから合祀したものである。　現在の本殿は寛永二三年に三芳野で使用されて
たもので、三層社流造り銅板葺のふさはしいものであるが簡素な美しさをたたえ
ている。重要文化財

三芳野神社

三芳野とは、伊勢物語に出てくる川越地方の古名
からべ呼の「天神様の能道」とはこのことという
社殿は寛永二年の造営で、県指定重文である。

東明寺　　時宗　　志多町

東明寺は一遍上人の開基になるといわれる古刹であり、川越夜戦（後述）
最後の戦いがこの寺で行われた。　二代目の住職・鶴江と言う僧は、
くこの寺を城に落ちて戦死をとげた。　この合戦によって焼失現在の

建物は、その後江戸時代に再建されたものである。

附　川越夜戦

十六世紀になると、小田原北条氏の勢力は急激に隆盛となり、天文六年（一五三七）七月上杉朝定、朝成の守る川越城を急襲した。朝成は捕虜となり、朝定は、松山城の難波田氏のもとに敗走した。同時に江戸城も失っている。

扇谷上杉が無力になった結果北条氏の圧力は、ことごとく山内上杉にかかってきたので、山内憲政は勢力の挽回を図るため、駿河の今川氏と結び、北条氏を挟撃しようと策したが、不成功におわり、こんどは、古河の足利晴氏を味方に引き入れた。

天文十四年九月（一五四五）山内憲政および扇谷朝定が八万の兵を集めて砂久保（現川越市砂久保）に陣し河越城を攻めた。城内には福島左衛門綱成以下三千人が籠って頑強に抵抗したので、止むなく兵陣を引き兵糧攻めにした。

翌十五年四月北条氏康は河越城明渡しを条件に籠城者の救免を申出たが、拒否されると、氏康みずから八千の兵をいきい、救援のため出陣した。

和を乞う態度をして上杉方を油断させ、虚をついて二十日の夜城中城外から

一斉に突出し一撃に上杉陣を潰滅させた。義理一辺の応援にきていた足利・結城・小山などの軍勢は、たちまち浮足立ち、総崩れとなり、上杉氏定、倉賀野・難波田は敗死、上杉憲政は、ほうほうのていで上州平井へ逃れた。

こうして上杉の有力家臣大石・藤田氏らは続々と北条へ軍門に降り、上杉のため節を持し降らなかったのは、岩槻の太田資政入道三楽、上州箕輪の長野業正ら数人にすぎなかったという。

この戦いの結果、元武蔵はこの北条氏の地位は動かぬものとなり、上杉憲政は天文二一年、軍師景虎を頼って越後に没落する。

川越夜船

川越から東京へ出るのに今は電車で一時間くらいで都心に達するが、江戸時代は、川越街道十三里を徒歩か馬で行くか新河岸川を舟船することになる。この舟運は元亨信船が開発したもので伊佐沼を水源とし、延長一二キロ、八十石の、平底の平らな高瀬舟を用いた。

仙波河岸（現東上線新河岸駅付近）が始点で、この付近は回船問屋や廻漕肥料

問屋が多く、にぎわっていた。ここから両岸を綱でいっぱり、棹を使い、荒川との合流点新倉（現和光市）から荒川に出て始めて櫓を使った。だから新倉や引又（現志木市）河岸には曳舟人夫（のつつけ人足とよんだ）の溜り場があった。この舟は米俵二百俵のほかに旅客ものせている。

皆に六一キロ

出り三十六里（一四四キロ）を午後三時に新河岸を出て、江戸元町（現言問橋）には翌日の昼頃に着いた。川越からは、米、炭、野菜等を運び、帰路は江戸から、油、雑貨、衣料等を運んでいる。

明治二十八年川越鉄道（川越～国分寺）明治三十九年川越電気鉄道（川越～大宮）大正六年東上線と逐次鉄道が開通するにつれて、これにとってかわれ次第に衰微し、昭和のはじめに河川改修が行なわれたため、江戸時代から栄えたこの舟運もついに終りとなった。

参考文献

武蔵野の歴史　河田　楨

川越・城と町・ここの歴史　小倉　功

新編武蔵風土記稿　斎藤　真夫

校訂　埼玉県板石塔婆調査報告書　徳川　善彦

埼玉県教育委員会

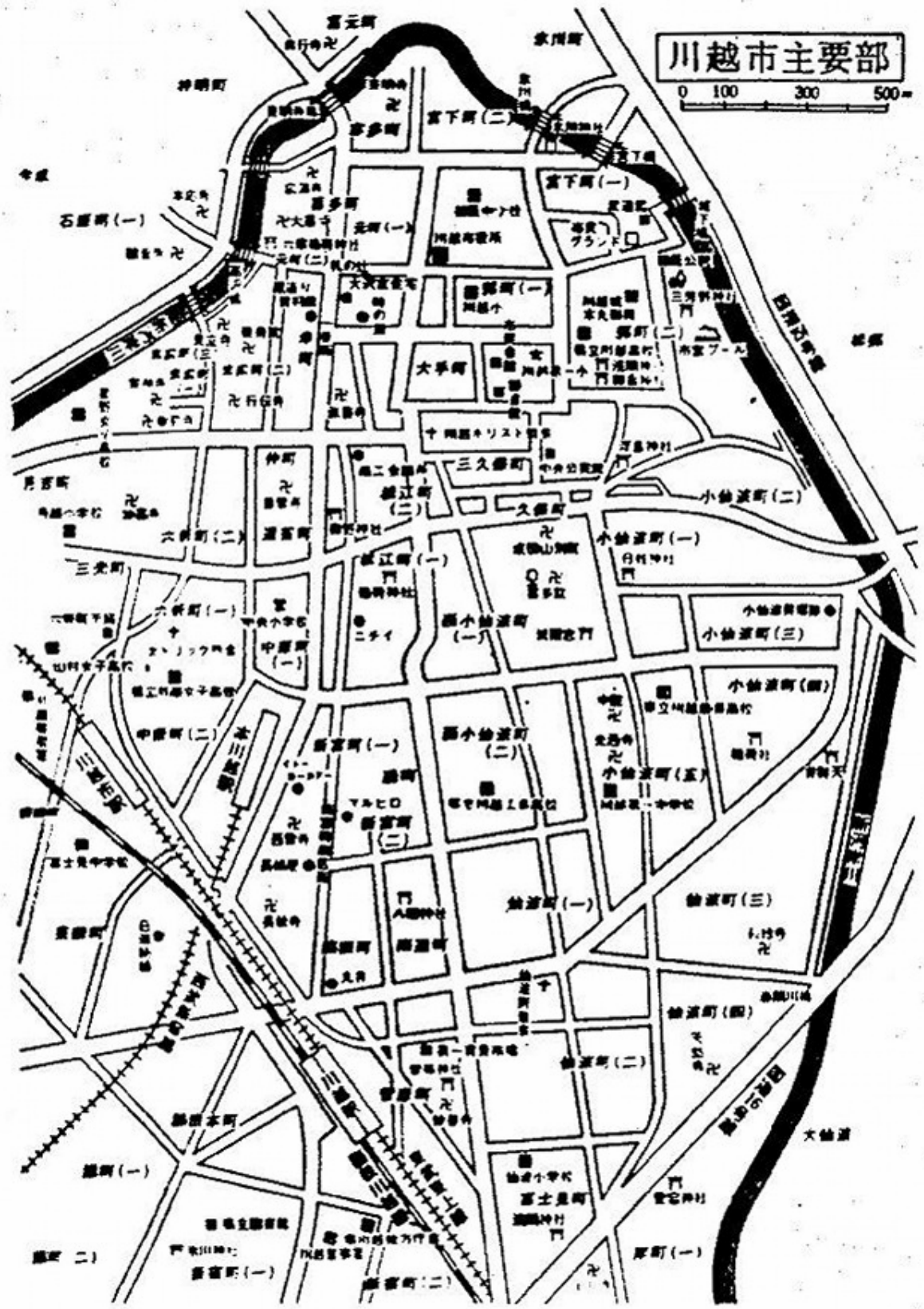
埼玉県文化財

川越の歴史年表　言川　弘文館

川越市教育委員会

川越　古彩　会

文責　元田　善夫


川越市主要部
0 100 300 500m
宮元町
氷川町
神明町
宮下町(二)
宮下町(一)
宮下橋
多賀町
石原町(一)
元町(一)
元町(二)
海鼠グランド
郭町(一)
郭町(二)
大手町
三久保町
久保町
小仙波町(二)
小仙波町(一)
小仙波町(三)
小仙波町(四)
小仙波町(五)
仲町
六軒町(二)
六軒町(一)
三光町
中原町(一)
中原町(二)
越辺町(二)
越辺町(一)
新小仙波町(一)
新小仙波町(二)
新宮町(一)
新宮町(二)
本川越駅
仙波町(一)
仙波町(二)
仙波町(三)
仙波町(四)
仙波町(五)
富士見町
新宮町(一)
新宮町(二)
大仙波